

全小国研会報

No. 97

発行所
全国小学校
国語教育研究会
事務局
八王子市立
高倉小学校
事務局長 田中順子



第五十三回全国大会 広島大会を終えて

全国小学校国語教育研究会
会長 佐伯孝司

昨年十一月十六・十七日、「伝え合う力を高め、言葉の力を育む国語科教育の創造」を主題に、全国小学校国語教育研究大会広島大会を開催しました。四年ぶりに、多くの皆様方が参集して学び合うことができました。また、十二月・一月には、大会の内容を動画で配信するオンデマンド開催も行いました。全小国研の目的である「全国の小学校国語教育関係者の力を結集し、わが国の小学校国語教育の推進と発展に寄与する」ために、広島からの力強い発信を広く皆様にお届けすることができたと思っています。

大会二日目、私は、広島市立本川小学校会場に行きました。校内にある平和資料館を訪れると、六年生児童が迎えてくれました。資料の説明にとどまらず、訪問する私にも平和への願いが伝わるように心を込めて話す児童の言葉に、どんどん引き込まれていきました。児童は私の反応を見ながら補足したり、質問等に応じたりしてくれましたので、対話が充実し、そこから思いや考えが深まっていると実感しました。これまで身に付けてきた言葉の力を駆使し、目的や相手に応じて伝え合うことができる児童の姿から、広島で大切にされてきた言葉の力を感じました。もう一つの会場校、広島市立白島小学校でも、公開授業はもちろん、児童の発表や学ぶ姿、掲示物を含めた校内の言語環境等、素晴らしい研究成果を受け取ったと多くの称賛の声を聞きました。研究協議会、全国からの実践提案、参加された皆様の活発な協議からも、多くのことを学び合うことができました。また、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 国立教育政策研究所教育課程調査官・学力調査官 大塚健太郎様はじめ、講師の先生方から貴重な御講演・御講話をいただきました。この後のページをぜひ御覧ください。大会の成果を改めて共有し、今後の研究にお役立ていただければ幸いです。

開催にあたっては、大会実行委員長 岩本ゆか様をはじめ実行委員会の皆様、広島市小学校教育研究会国語科部会及び広島県小学校教育研究会 国語科部会の皆様、会場校の皆様、多大なる御尽力をいただきました。大会を支えてくださいました関係の皆様方に心より感謝申し上げます。

今年度は、山口県で第五十四回全国大会を開催いたします。全国の素晴らしい研究活動から、皆様と共に学ぶことができるよう努めてまいります。

(東京都渋谷区立上原小学校長)



第五十三回全国小学校国語教育研究大会

実行委員長 岩本ゆか

第五十三回全国小学校国語教育研究大会広島大会は、多くの皆様方の御支援により、対面とオンデマンドの二刀流で開催することができました。令和五年十一月十六日、十七日に行った四年ぶりの対面開催では、作家 朽木祥先生、慶應義塾大学教授 今井むつみ先生、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 国立教育政策研究所教育課程調査官・学力調査官 大塚健太郎先生に御講演を、広島大学教授 難波博孝先生、間瀬茂夫先生に御講話をいただきました。また、白島小学校、本川小学校で授業実践を公開し、広島市から四本、広島県内から二本、全国から六本の実践提案を行いました。参観者の皆様から「広島に来て良かった」「足を運んだ甲斐があった」など、大変御好評をいただきました。

十二月十八日から一月三十一日までのオンデマンド開催では、期間中何度でも視聴できるようにしました。対面開催の参加者には、改めて講演や講話、各授業実践、提案発表をふりかえって新たな気付きや感想が生まれる場に、オンデマンド開催のみの参加者には対面参加と同じ学びの土俵に立つことで、実践や提案についての考察を深める場になったと思います。それぞれの学校や教育の現場で、本コンテンツを活用していただいたというお話も聞かれました。このオンデマンドページを期間内に何度も御視聴いただき、「広島」を見て、味わい、学び、高め合うことができる場にしていただけたならば幸いです。

私たち広島市小学校教育研究会国語科部会は、全国から御参加いただいた国語科の授業づくりについて学びを深める機会に恵まれた今回の取組を契機として、令和二年度より「伝え合う力を高め、言葉の力を育む国語科教育の創造」を大会研究主題に掲げ、研究を推進してきました。本大会で私たちが得た実り（成果と課題）はとても大きなものでした。本大会の取組が次年度以降の全国小学校国語教育研究会の礎となれば、これ以上の喜びはございません。

末筆になりましたが、お力添えくださった全ての皆様、いろいろな形で御参加くださった全ての皆様に、衷心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

(広島県広島市立高南小学校長)



第五十三回 全国小学校国語教育研究大会 広島大会 基調提案

広島市立牛田小学校 教諭 横矢 清人

一 研究主題

伝え合う力を高め、言葉の力を育む国語科教育の創造

子供たちの生活に生きる言葉の力の育成

く生活の様々な場で伝え合う力を生かし、

思考力・想像力を高める子供の育成

二 研究主題設定の理由

超スマート社会とも言われる「Society 5.0」の到来、スマートフォンやタブレットの普及、新型コロナウイルス感染症の流行などの社会の変化は子供たちの生活にも大きな影響を及ぼしている。そのような中で、令和三年一月二十六日に中央教育審議会から打ち出された「令和の日本型学校教育」では、これまで以上に他者との対話・協働に重点を置いて、教育活動に取り組むことが求められている。

また、国際平和文化都市である広島市では、広島市の教育理念である「心身ともにたくましく、思いやりのある人の育成」に向けて、

- ① 本質や根源を探究し、課題解決に向けて論理的・主体的に考え行動する力
- ② 平和を希求する心
- ③ 互いの違いや多様性を理解・尊重し、共生・協働する力
- ④ 豊かなコミュニケーション能力
- ⑤ 自分たちのまちを愛する心

この五つの資質・能力の育成を目指すことが、「広島市教育大綱（令和三年度改定）」で示されている。

このような資質・能力の育成のために、広島市では、家庭、学校、地域が連携・協働しながら、誰一人取り残さない、「豊かで深い学び」による広島らしい教育の実現に向け、各教科指導をはじめ、教育活動全体で取組を推進している。国語科においては、教科の特質から②③④の資質能力の育成に向けて、協働的な学びを取り入れ、「伝え合う力」を高めていく中で言葉の力を育むとともに、日常生活において国語科で培った「伝え合う力」を子供たちが生かせるようにすることで、豊かで深い学びを

実現でき、広島市が目指す資質・能力を育成することができると考える。

平成二十九年告示の小学校学習指導要領 国語科の目標には「日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。」と示されており、広島市の国語科教育が目指す「豊かで深い学び」は、国語科で付けたい資質・能力の育成にもつながる。

対話・協働を通して伝え合う力を高めることは、「令和の日本型学校教育」「広島市が目指す教育」のどちらの側面からも重要であるとともに、子供たちの確かな言葉の力の育成につながると考え、広島市小学校教育研究会国語科部会では、この研究主題を設定した。

三 広島市が目指す子供の姿

広島市の国語科教育で目指す子供の姿は三つである。

- ① 「伝え合い」を通して、自分の考えを広げたり深めたりする子供
- ② 国語科で付けた言葉の力を、生活の中で生かすことができる子供
- ③ 生活の中で伝え合う力を生かし、思考力・想像力を高める子供

四 これまでの広島市小学校教育研究会国語科部会の研究

広島市では、これまで以下のような副主題で研究を進めた。

- 一年次 「主体的な学びを引き出す学習課題の設定」
- 二年次 「対話的な学びを深める学習指導の工夫」
- 三年次 「子供たちの生活に生きる言葉の力の育成」

四年次である今年度は、「子供たちの生活に生きる言葉の力の育成―生活の様々な場で伝え合う力を生かし、思考力・想像力を高める子供の育成―」を副主題に設定した。三年次までの取組を基盤としつつ、次の三つの視点で研究を積み重ねている。

- 目の前の子供の興味や関心、必要感に合わせた学習課題の設定
- 教科横断的なカリキュラム・マネジメント
- 単元全体を見通した協働的な学習の場の設定

子供たちがこれまで培ってきた伝え合う力を他教科や生活の中で生かし、思考力・想像力を高めることができる姿を目指している。

◆記念講演Ⅰ◆(要旨)「JMSアステールプラザ」

文部科学省初等中等教育局教育課程教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部
教育課程調査官 学力調査官

大塚 健太郎 様

演題 「学習指導要領の趣旨の実現に向けて」

「言葉による見方・考え方を働かせる国語科の授業づくり」

一 学習指導要領で目指すこと

学習指導要領全面实施から四年目を迎え、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に整理された資質・能力については、教育現場に浸透してきた。今一度、「なぜ三つの資質能力を育成するのか」という背景について考えるときともに、国語科教育では何ができるのかという視点に立った授業づくりを進めていくことが大切である。

日本財団「十八歳意識調査」によると、自分の夢をもっていると答えた日本の子供の割合は、他国と比べて低いことが分かる。子供たちが夢をもてるかどうかは、自分が社会の一員であるという実感をもつことができるか否かと関わっている。人口減少に歯止めがかからない昨今、社会に関心をもち、主体的に行動することのできる人材が減少していることは、将来的に社会が立ち行かなくなることをも意味する。他者との対話を通してよりよい考えを導き、言葉で伝えることができる人材の育成は急務である。

このような背景から、子供たちが未知の状況に対峙した際に、他者と手を携え、持てる力を社会に生かすことができるよう、国語科教育においても、三つの力をバランスよく育むことが求められている。

二 小学校国語科の目標と授業づくり

国語科の目標は、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成すること」である。見方・考え方を働かせるとは、児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることである。目指すべきは、指導事項に示す資質・能力を育成することであり、授業づくりにあたっては、言語活動が目的となっていないか、教材や言語活動から単元を考えていないか、ということに留意する必要がある。

三 学習指導要領の趣旨を実現する授業改善に向けて

子供たちに身近な題材を……。ペアトークの後にグループでの話し合いを……。といった、授業づくりにおける固定概念に囚われていないだろうか。実際には、子供たちの生活とかけ離れた題材であるからこそ純粋に味わうことができることもあれば、決まった話し合いの形式が足かせになることもあるかもしれない。目の前の子供が主体的に取り組みたくなる課題を設定し、指導事項に示す資質・能力を育むために最適な活動を選ぶことが大切である。同じ題材でも、何に重きを置くかということや、子供たちの実態によって評価や学習の進め方も変わってくる。子供たちに失敗させないようにルールを敷くのではなく、子供たちの学びに教師がいかに伴走していくかが大切である。試行錯誤をする時間をもちながら主体的に学ぶには時間がかかる。トライ&エラーしながら学ぶ子供の姿を受け止め、系統的に繰り返し、学びの機会を設け、積み重ねていくことが大切である。

四 学習評価の改善に向けて

単元で取り上げる指導事項を確認し、目標と言語活動、評価規準を設定する。単に学習の成果のみを評価するのではなく、適切な時間に評価の場面を設けることで、児童の学習改善と、教師の授業改善に役立てることができる。

適切な時間に評価の場面を設けるとは、児童が試行錯誤しながら学習する場面を確保し、評価することともいえる。教師は、児童が他者から得た指摘や助言を踏まえて学びに向かう姿を見取り、評価する。評価したことを指導に生かし、児童の目標達成のために必要な手立てを行う。それにより、指導と評価が一体化する。

指導の内容や手立てを改善していく中で、これまで慣行として行われてきた評価の方法について、必要性・妥当性のないものについては見直していく視点をもつことも求められる。

五 「令和の日本型学校教育」とGIGAスクール構想

「個別最適な学び」や「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、一人一台端末の活用は有効である。空間的・時間的な制約を超えた学び合いを進めるとともに、リアルな体験を通して学ぶことの重要性にも目を向け、これまでの価値ある教育実践とICTを効果的に組み合わせることが期待される。

【文責】松本 友美

◆記念講演Ⅱ◆(要旨)〔白鳥小学校会場〕

演題「本物の言葉力を育む教育」

慶應義塾大学 教授 今井 むつみ 様

本物の言葉力を育むためには、生きた知識が必要である。知識には「生きた知識」と「死んだ知識」があり、生きた知識とは問題解決のために使うことができる知識で死んだ知識は丸暗記しただけの知識である。生きた言葉の知識はいかにして豊かになっていくのだろうか。

言葉を使えるということは、ある単語についてどの範囲までその言葉が使えるか、その言葉を取り巻く言葉をどれだけ知っているかなど、言葉のもつ概念を深く知ることである。言葉の正確な使い方ができるようになるためには、その言葉と似た言葉との意味区別、語彙システムの理解ができるようにならなければならない。語彙システムにはスキーマが存在する。スキーマは自分の生活経験の中で発見を繰り返して、無意識的に作り上げられていくものである。そのスキーマを育てていくことが大切である。

国語科は言葉について言葉を使って言葉を学習するものであり、全教科の基礎となる教科である。言葉とはどういうものか、言葉に興味を持って探索したいと子供が思えることが大切である。言葉は教えられないのではなく基本的には自分で覚えていく。まずは言葉の存在に気付く、全てのものに名前があることを知るが、意味は自分で推測して見付けていく。覚えた新しい言葉を新しい状況に合わせて拡張し、どこまで拡張できるか探りながら言葉を獲得していく。言葉を覚えるということは言葉の仕組みを探求すること、言葉のシステムを自分で再構築すること、相手の心を理解することである。言葉を多く知っているということは、そこに至る過程で推論を多くしてきたということであり、学力とも相関する。

推論するためにはスキーマを持った生きた知識が必要である。適切で豊かなスキーマがあれば学んだ内容を自分の知識に関連付けて推論できる。また、情報を解釈して自分の持っている知識に必要な時に取り出す力や思考を柔軟に対応させる力も必要である。言葉を覚えることは思考力を鍛錬することである。そのために、日常生活の中で言葉を多く使う場面を設定する。遊びの中で言葉の使い方を一緒に考え、色々な文脈で使い面白さを感じる活動も必要である。

断片的な知識を覚えるだけでは意味がない。自分の生活経験から推論や抽象化を経て自分の身体の一部となったもの、つまり「記号設置」した概の総体が、スキーマを構成する。そのスキーマを利用して、さらに新しい知識を自分で学習することができるようになる。

【文責】原田 啓

◆記念講演Ⅱ◆(感想)〔本川小学校会場〕

児童文学作家 朽木 祥 先生の講演を聞いて

演題「物語ること、伝えること」他者の苦痛へのまなざしを育てる」は、ぐいぐいと心に迫り、示唆に富む言葉との出逢いがたくさんあった。この感動を少しでも全国の研究同人と共有したいと思ひ所感を述べる。

今回の講演を拝聴し、朽木先生の作品に込められているテーマは、「共感共苦」が土台になっていると感じた。先生が物語を紡ぎ、日本だけでなく世界各地でその思いを講演する大きなエネルギーは、戦争体験そのものを語り継ぐのではなく、物語を紡ぐ言葉の力によって、人間の味わう苦しみや悲しみ、無念や絶望などの心象を推し量ることによって、そこに生きていた人々の心情を目撃することはできるといふ強い信念があるからに違いない。本講演を通じて、朽木先生が常に「子供たちが戦争やヒロシマを『自分ごと』として受け止めるために」、膨大な取材や調査を行い、戦争の是非、功罪を超越した、そこに生きる人々の姿に自分自身を投影して読みたくなる、読まざるを得なくなる言葉を紡いでいらつしやることを理解できた。人類普遍の信念に基づき、綿密な準備と創造力を尽くして、私たちにとつての「負の記憶」にどう向き合うか、そのきっかけを物語の力でどのようにしてくれるのかという、使命感と言える思いが伝わってきた。それは、「作品は作者の手を離れた瞬間からどのように読まれてもよい。」と前置きしつつ、自身の作品を読んだことで、ヒロシマ(戦争)が気になつてもつと知りたひ、平和資料館へ行つてみたという思いが出たときに、「行間を読んでくれたと考えている」とおっしゃったことにも表れている。

現在執筆活動のみならず、世界中から招かれ、意欲的に講演活動にも取り組んでいらつしやる先生の旅のエピソードを拝聴するにつけ、共にそこに旅をしている感覚、同じ体験をしたい思いに駆られた。

第二次世界大戦の反省から、ドイツでは平和教育が徹底され、心が育っていること。それが他者の苦痛へのまなざしに通じること。また、「つまずきの石プロジェクト」の話。その石に躓くとき、心まで躓く。それが犠牲者の「負の記憶」を思い起こすきっかけとなり、故人がかつてこの世で泣いたり笑ったりしていたと想像することにつながるのだということなど、先生の作品とつながる世界を垣間見ることができた。

また、「詩や短歌などを暗記させる課題は本当にためになった。」「よく読む人はよく書く人。とにかく読書が大事だ。」など、国語教育に携わる私たちへの示唆になる御自身の経験も語ってくださった。子供の頃からの美しい日本の音読と暗唱によって、豊かな日本語の音律が体に入ったことを「若い日に読んで心に残った言葉は何かの形でいつかまた蘇って、自分をすごく深いところで支えてくれたり励ましてくれたりする。」と実感込めて語る姿が非常に印象的だった。

【文責】全小国研副会長 長沼 正城

◆指導講話◆(要旨)〔白島小学校会場〕

演題「国語科授業における「関わり合い」と言葉による見方・考え方」

広島大学大学院 教授 間瀬 茂夫 様

一 関わり合つて学ぶことの人類史について

関わり合うことは人間の本質的なことである。これからは、模倣による学びから、関わり合いによって創造していく学びが必要な時代である。

二 関わり合いと話し合い

関わり合いは、社会的スキルを身に付ける、合意形成をするなど様々な意味をもつが、知識の創造にこそ本質がある。子供たちに真理を探究するようなプロセスを体験させたい。

「話すこと・聞くこと」の発達に関するアンケートを2000年代にカナダの小学校教師と日本の小中学校教師に実施した。当時、日本の教師は、上学年にならないと話し合いができていないととらえ、カナダの教師には低学年でできるという回答が多かった。現在は音声言語の指導が一般的となり、低学年からできると考える先生が多いのではないかと。

三 「関わり合い」と「言葉による見方・考え方」について

関わり合いには、互恵的・累積的・探究的の三種類があると考えるが、これらは、イギリスの教育心理学者マーサーの「論争的会話」「累積的会話」「探索的会話」という会話の三類型を基にしている。児童の話し合い過程を調査したところ、三年生では言い合いに終始しがちだが、四年生で探索的会話が芽生える一方、高学年では累積的会話にとどまるという結果が出た。探究的会話が達成できるよう、計画的にカリキュラムを組み、授業でどのような関わり合いや話し合いをさせるか意図的に学習課題を設定することが大切である。探究的な学びは、マーサーの言うグラウンドルールが成立しているときに成立しやすい。それを意識することには、学校全体で取り組むとよい。白島小学校では、それに具体的に取り組んだ。

授業で話し合いを意識する方法には、観察、台本、文字化資料、動画などがあり、それらを用いた指導を通して、グラウンドルールや話形などを学んだり、どうしたらよくなるかを意識したりすることができる。台本を自作すると、学んでほしいことを意図的に仕組むことができる。

四 白島小での「関わり合い」と「言葉による見方・考え方」

白島小学校の実践研究は、文種を絞らず、国語科の全ての学習領域で、関わり合いの意図的な指導をカリキュラムの軸にすえて取り組んできた。どの学年の授業でも、グラウンドルールの意識化を授業の基盤にして、言葉による見方・考え方を探究する学びを実現しようとしていた。

【文責】田坂 綾香

◆指導講話◆(要旨)〔本川小学校会場〕

演題「AI時代における文学教育」

広島大学大学院 教授 難波 博孝 様

これからの時代、チャットGPTや生成AIの発展により、レポートや感想文を子供が簡単に書くことができ、宿題としての意味をなさない時代になってくる。一人に一台のインターネット端末が支給されている今、指導者は学習者が学校外でAI機器を用いて学習していることを前提にしなければならぬ。また、チャットGPTは、もつともらしい回答をするが、事実に基づかない回答(「ハルシネーション」)を起こす。作成された情報について何も知らない子供が見ても、間違いがあることを判断することができない。だからこそ、受け手の能動的な読解力と広い視野を鍛えていく国語の授業を創つていく必要がある。このような時代であっても、AIが生成した文学に、人間は涙を流すことができる。つまり、人間には、体験し、体験したことによって感情を動かすことのできる能力がある。一方で、これは意図して育てなければならぬ。さらに、多くの間接体験ができる今、直接体験がより価値のある体験になっているが、文学も、それを直接体験できる力、文学体験力を伸ばす必要がある。

学校教育法第二十一条にも示されている通り、文学は芸術であり、生活を明るく豊かにするものである。これからの時代、ますます必要とされるのは、芸術を感じられる力であり、それは、叙述に基づいて読むだけでなく、想像し、体験する力である。これが文学体験力である。文学の世界に入り、想像することは授業でしかできず、授業を工夫しなければ子供たちは体験することができない。一問一答の授業や教師の思い描いた答えに導くような授業では学習の目的に到達しない。叙述にある言葉に頼って、全体を通して主人公の変化を捉えたり、身体体験を通して直接体験をしたりすることが今の子供たちには必要である。

そのために、指導要領にある指導事項をきちんと指導し、言語活動を工夫することが大切である。頭の中でいきいきと想像できるよう映像化や動作化などの体験をしたり、私だったらと批判読みしたり、登場人物に同化したりしながら作品を読んでいく。その読みを他の文学作品へと広げられるようにすることが大切である。

読むとは、文学を体験することであり、文学体験力とは、外からの観察者ではなく、内において体験する目撃者になる力である。この力を育てることが、これからの文学教育に求められている。

【文責】岩見 拓也

◆授業・協議会◆ 「白島小会場 第一学年」

単元名 せつめいする文しようをよもう「じどう車くらべ」

授業者 広島市立白島小学校 教諭 橋本 美穂 先生

一 提案の概要

「じどう車くらべ（光村図書出版下）」では、「そのために」という語に着目して、自動車の「しごと」と「つくり」を、関係付けて捉えらるという課題を設定した。取組において、三つの指導の工夫を行った。一つ目は、文章の構造を捉えやすくする「全文シート」と、その時間の学習箇所が分かる「部分シート」の二種類のワークシートの活用をしたことである。二つ目は、「しごと」と「つくり」の部分を色別に線を引かせ、教材文の文章構成のパターンを理解させたことである。三つ目は、動作化しながら内容確認をするペアトークや、気付きを交流するペアトークの活動を仕組むことで、実感の伴う言葉の理解や事柄の関係理解を図ったことである。

二 研究協議

Q 動作化しながら対話する活動は有効に思えたが、動作化が単元や本時のゴールの姿につながったか。

A 動作化することは、実感の伴った言葉の理解につながると思うが、本時は十分ではなかった。書かれていることを確認するとともに、関わり合いによって気付きや発見がふくらむようなペアトークとなるための指導や手立てを、今後積み重ねていきたい。

Q 「はなまるめあて」の相手を六年生にした意図は何か。

A これまでの行事を通して、六年生との関わりが深まっていた。前単元の説明的な文章「くちばし」の学習で、六年生に伝えたいという意見が子供たちから出たため、交流の相手を六年生とした。

三 指導助言

広島市立長東西小学校 前校長 平田 恵美子 先生

子供は、「言葉による見方・考え方を働かせる授業」「学ぶことを実感する授業」の中ではわくわくして学ぶことができる。子供たちの「言葉への自覚」を高めるために、言葉に意識が向くような意図的な発問を考え、言葉にこだわり、言葉を手掛かりに試行錯誤や思考をする言語活動を仕組むことが大切である。動作化やペアトークなど、日常的に行われていることも、指導者が意図をもって、活動させる必要がある。今後も、単元計画・発問・言語活動を工夫して実践を積み重ねていきたい。

【文責】堤 紀音

◆授業・協議会◆ 「本川小会場 第一学年」

単元名 おもいうかべながらよもう「くじらぐも」

授業者 広島市立本川小学校 教諭 木村 咲斤 先生

一 提案の概要

主体的な伝え合いを通して、「登場人物の行動を具体的に想像すること」に取り組んだ。想像する際の手立てとして、①0次の設定②場の工夫③動作化を行った。また、伝え合いの手立てとして、①付箋の活用②台本の大きさや数の設定③共有方法の工夫に取り組んだ。

二 研究協議

Q 付箋の色は、誰が書いたか分かる以外に、意図はあったのか。

A ない。児童に相談してもらい、自由に選べた。

Q 「叙述に注目」とは、具体的にどのような言葉が出たらよかったか。

A 評価を考えると、「海が見える」など、叙述を抜き出すだけではC。そこまで行ってみたい」まで加わるとBと考える。叙述を基に想像を広げてほしい。

Q 0次での Google Earth の活用が、生きている場面はあったか。

A 0次では、「原爆ドームがあるよ」などの声が出たため、本時においても「原爆ドームが見えるな」など、0次と関連した考えが出ることを想定していたが、そこまでは及ばなかった。

三 指導助言

広島市立亀崎小学校 前校長 山崎 淳子 先生

キーワードは、対話・協働。協働が新たな発見を生み、思考力・想像力を育てる。「なりきりげき」は、児童の実態に合った有効な手立てだった。動作化をする中で自然な伝え合いが生まれ、活動が効果的に進んでいた。また、全体発表のとき、子供たちが、発表における友達の高さを見つけることができていたこともよかった。これにより、対話を通して考えを広げたり、納得したりすることができていた。

事前授業で、絵のみならず、叙述にも注目させるよう助言した。しかし、絵を生かして、自由に想像の世界で遊ばせることも一年生にとって効果的である。その中で叙述を基に考えている児童を取り上げて、言葉掛けをしてもよかった。一方で、叙述と結びつけて考えることが、中・高学年の学習で大切になる。継続し、国語力向上につなげてほしい。また、机間指導の際、よい記述には積極的に赤線を引き、伝え合いにつなげるのもよいのではないか。

【文責】伊野 実咲季

◆授業・協議会◆ [白島小会場 第二学年]

単元名 そうぞうしたことを、音読げきであらわそう 「お手紙」

授業者 広島市立白島小学校 教諭 矢野 陽子 先生

一 提案の概要

本単元では、叙述を基にして読み方や動きを工夫しながら音読劇に表す活動を設定し、表現の工夫の理由を児童同士が聞き合ったり考え合ったりしながら学びを深めることができるようにした。また、児童の思考を視覚化するために、本文の行間を広くした台本を用意し、児童が自分の考えを書き込みできるようにした。本授業では、音読の仕方について、児童から様々な考えが出てきたため、話し合う必然性が生まれていた。教師が児童を誘導する場面があったこと、自分の考えを書くことができない児童もいたことなど、今後の課題となる点もあった。

二 研究協議

Q 教師が児童を誘導したとはどのようなことか。

A 児童が発言した内容をすぐに認めることができず、教師が他の言葉で言い換えてしまった場面があった。他にも、教師の方から「人物のどの言動から『親友』だと分かるか」というような発問をしてしまった。

児童の発言内容を教師が言い換えたことで、その児童は安心し、さらに周りの児童の共感の声やつぶやきが、発言した児童の自信につながっていたと感じた。

三 指導助言

広島県西部教育事務所 指導主事 横岡 洋子 先生

本単元では、児童が主体的に学習できるような言語活動が設定されるとともに、児童が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるのかといった観点で単元づくりがされていた。また、本授業では、児童が言葉による見方・考え方を働かせながら授業に臨んでいた場面が見られた。これは、これまで教師が児童の考えを丁寧に取り上げ、児童が自分と他者の考えを比較し、思考する場面を意図的に設けてきた成果である。

現在、児童の不読書率が高まっている。今後は、国語科の学習と読書活動を関連付けさせた更なる取組や、児童の発達段階に応じた言語能力の向上に繋がる取組を行っていただきたい。

【文責】初山 朋代

◆授業・協議会◆ [本川小会場 第二学年]

単元名 そうぞうしたことを、音読げきであらわそう 「お手紙」

授業者 広島市立本川小学校 教諭 永山 ゆうこ 先生

一 提案の概要

教師が単元の一次で学習のねらい（単元の目標）を児童にとって分かりやすい言葉で示し、それを基に児童が学習計画を立て、みんなで考えたい問いを設定することで、児童が登場人物の行動やその理由を具体的に想像し、自分の言葉で考えを伝え合う授業になった。

二次では、登場人物の行動やその理由、児童が考えた問いについて具体的に想像するために、動作化を手立てに学習をした。その際、全文を一枚に収めたプリントや、音読や動作化の仕方を書き込めるよう行間や余白を工夫した台本プリントを使用したことは、児童が叙述に基づき、場面の様子に着目して想像することの助けになった。

二 研究協議

Q (教室掲示の)「ことばの宝箱のような語彙力を増やす指導の工夫は。

A 言葉の意味を児童の言葉で説明させるよう工夫した。そうすると児童の経験と言葉の意味が結び付き、教師が説明するよりも実感を伴った理解を促すことができると感じた。「〜のような」「〜の感じ」「たとえば」という表現を示したり評価したりすることで、児童は自分の言葉で説明しやすくなる様子だった。

三 指導助言

広島県教育委員会 指導主事 福田 菜津美 先生

本単元で行う音読劇は、単元の目標を達成するために適した言語活動であった。

本時に児童が設定した問いは「なぜかえるくんはまくんに手紙を出したと言ったのか」であった。この問いを、動作化して考えることで、場面の様子に着目して登場人物の行動を具体的に想像することができ、ねらいに迫っている児童が多く見られた。①単元構成の工夫②児童が学びの履歴を自由に振り返る環境の工夫に起因していた。

これからの授業に求められることは、教室や学校に閉じない学習づくりである。例えば、①並行読書の工夫②並行読書を生かしたり、相手意識を学級や学年外にもたせたりした単元構成の工夫が考えられる。

【文責】丸田 健太郎

◆授業・協議会◆ 「白島小会場 第三学年」

単元名 進行を考えながら話し合おう 「はんで意見をまとめよう」

授業者 広島市立白島小学校 教諭 溝上 大樹 先生

一 提案の概要

子供たちが話し合いにおける役割を理解し、お互いが納得できることを目指して話し合いを積み重ねた。目指す姿を子供たちと共有したこと、話し合うための視点を整理したり、話し合いのレベルごとの台本を作ったりしたこと、子供たちは課題意識をもって学習を進めることができた。一方、本時では子供たちに求めるレベルが高かったため、子供たちは探りながら話し合いを進めていた。

二 研究協議

Q モニタリングの役割や効果をどのように想定していたか。

A すぐにレスポンスができ、客観的に振り返ることができると考えている。

Q 三つの視点から子供の様子をどのようにとらえていたか。

A 自分の意見を言えており、互恵的な関わりができていた。よいところや改善点を次に生かそうとする姿は累積的、探求的な姿であった。

・ 以前、付せんを利用し、共通点や相異点に着目させたことがあった。

・ 今日子供たちが意見を組み合わせさせて納得していきよかつた。

・ モニタリングという方法を使うことで、目的意識や相手意識をもって取り組んでいた。スパイラル的に話し合いが高まっていた。

三 指導助言

広島都市学園大学 准教授 瀧口 美絵 先生

発達段階に応じた話し合いの姿がある。中学年は論争的な話し合いから脱却し探求的な話し合いへ発達する。高学年では反論をしたり、代替案を出したりする。今日の授業では、納得することが目標であった。

話し合いでは、発達段階に応じた支援や、視覚化の要素を取り入れることが大切である。話し合いのパターンを掲示することで、視覚的に確認することができる。今日は、自分の役割を理解して意識できていた。司会が上手にアシストし、児童は意見を出すことができ達成感を感じていた。話し合いが積み重なったからこそ今日の話し合いだったのではないだろうか。

【文責】横山 裕美

◆授業・協議会◆ 「本川小会場 第三学年」

単元名 場面をくらべながら読み、感じたことをまとめよう

「ちいちゃんのかげおくり」

授業者 広島市立本川小学校 教諭 山本 理恵 先生

一 提案の概要

研究主題に迫るために、自分の考えを可視化して、心情曲線「ちいちゃんのかげおくり」を作ることで、必然的に気持ちに着目して読んでいくことができるようにした。書き溜めた心情曲線を視覚的につなげて見ることができるよう、屏風折りのようにまとめいく。その結果、次の場面も詳しく読んでいきたいという児童の意欲を引き出し、既習場面に戻って自分の考えを深めることができ、子供が主体的に伝え合う授業を目指した。

二 研究協議

Q 気持ちに分かる記述を見付ける活動の際、一人一カ所に絞った意図は何か。

A ICT機器ムーブノートの集計機能を使い、全児童が選んだ箇所を一斉に示すため。

Q 物語文の授業を進める際、全体を読み進めながらがよいか、一場面ずつがよいか。

A 一場面ずつ丁寧に読み進めた。心情曲線を書き溜めていくことで、それぞれの場面の比較が行いやすく、子供が主体的に伝え合うため。

三 指導助言

広島大学附属東雲小学校 副校長 谷 栄次 先生

物語は初読を大事にし、自分の考えを自らの言葉で端的にまとめることが重要である。その際に、根拠と理由の区別をつけて、自らの考えの形成をしなければならぬ。この単元では、登場人物の気持ちを考えるだけではなく、この物語を俯瞰して見て、読み手として捉えたときの自分の考えをもたせる必要性がある。主体的に伝え合うとは、相手を尊重し、伝えようと思える関係が土壌となる。これらは、教師が日々価値付けていく必要がある、子供同士の人間関係で決まる。

本教材のように戦争を題材とした教材を、この先も広島島の教員は、こだわりをもって扱っていききたい。

【文責】江種 崇史

◆授業・協議会◆ 「白島小会場 第四学年」

単元名 中心となる語や文を見付けて要約し、調べたことを書くこと

「世界にほこる和紙」「伝統工芸のよさを伝えよう」

授業者 広島市立白島小学校 教諭 村上 萌音 先生

一 提案の概要

本単元では、広島県の伝統工芸について調べたことを整理し、よさを伝えるリーフレットを書くという課題を設定した。「世界にほこる和紙(光村図書下)」では、筆者の考えや説明の仕方を捉えて要約することができるよう、「読み取りのコツ BOOK」や文章構成図を児童とともに作成した。また、児童の書いたリーフレットを、宮島にある店に置いて実際に観光客に見てもらえるようにし、児童が相手や目的を意識して書く活動に取り組めるようにした。

二 研究協議

Q 「世界にほこる和紙」の要約の目的は何か。筆者の考えを要約するのか、和紙のよさを要約するのか、どちらか。

A 筆者の考えを要約するようにした。書くことの単元に向け、二〇〇字という文字数に合わせて要約することに重点を置いた。

児童が中心となる語や文を選ぶことができるよう本時でも文章構成図を積極的に活用することや、文字数を視覚的に捉えられる教具を準備すること、話し合いの視点を示すこと、「ChartPT」を活用してできた要約文と比較すること等、様々な指導の工夫について意見が交わされた。

三 指導助言

広島市教育委員会 指導主事 松本 穂高 先生
要約という書く活動をイメージするが、実際はしっかり本文を読み、

必要な語や文を選ぶことが中心の学習となる。0次を単元のねらいに合わせて設定したり、書く活動に向けて相手・目的意識をもてるようにしていたりするところが効果的であった。交流の際は、話題を絞ることが大切である。和紙のよさや特徴について話し合いが深まるよう教師が視点をもっておき、適宜小グループに返しながら進めることで、すべての児童が交流に参加することができるだろう。また、ICT機器を活用することで、自分の考えを簡単に修正することができるため、児童が試行錯誤しながら、要約することができる。児童の主眼的な学びにつながるの

【文責】作花 詞子

◆授業・協議会◆ 「本川小会場 第四学年」

単元名 気持ちの変化を読み、考えたことを話し合おう 「ごんぎつね」

授業者 広島市立本川小学校 教諭 中屋 優理 先生

一 提案の概要

音読や動作化に興味をもっている児童の実態を踏まえ、言語活動として音読劇を設定した。活動を楽しんで終わりとまらないように、登場人物の気持ちやその変化を想像するために音読劇をするという目的を明確にした。また、グループで話し合いながら活動に取り組むことで、自分だけでは気付けなかった見方に触れ、登場人物の気持ちについて考えを深めることができるようにした。こうした取組によって研究主題に迫ることができると考えた。

二 研究協議

Q 動作化は、補助的な役割として捉えて取り入れたのか。

A 補助的な役割ではなく、音読も動作化も同程度の役割だと捉え、音読も動作化も両方含めての音読劇と考えている。

Q 兵十の気持ちを先に考えたのは、より深まると考えたからか。

A 兵十に視点が変換されることで議論が深まると考えた。また、児童から、第六場面での兵十に関する疑問が出たため、それを基に授業を組み立てた。

Q どのように、児童の疑問から課題を作り、学習課題を精査したのか。

A 「登場人物の気持ちを深めていくための学習課題」ということを押さえた上で、「個人で疑問を書き出す」↓「班で精査」↓「全体で共有・決定」の順で学習課題を設定した。精査の際には、「①明確に書かれていて分かること」「②みんなで深めたい分からないこと」「③登場人物の気持ちとは関係のないこと」の三つの視点をういた。

三 指導助言

広島市立梅林小学校 前校長 岩本 和貴 先生
本時の目標達成のために、音読劇がどの場でどう効果を上げているかを意識し、検証する必要がある。音読活動で児童が相互評価できる観点は限られて

いるが、劇化(動作化)を通して、評価の観点をより具体化・多様化し、心情に直結する話し合いをもつことができると考える。

・兵十の気持ちの変化を考える場では、「なぜ変わったのか」を問うことで

「ごんの何に気が付いたのか」という視点をもたせ、問題を掘り下げたい。気持ち・心情のより深く広い理解のために、人物の行動や場面の様子、情景などの手がかりから推測できるように、低学年からの積み上げが大切なことを意識し、組織的・系統的に取り組みたい。

【文責】中田 江美

◆授業・協議会◆ 「白島小会場 第五学年」

単元名 資料を用いた文章の効果を考え、それをいかして書こう

「グラフや表を用いて書こう」

授業者 広島市立白島小学校 教諭 廣安 遥 先生

一 提案の概要

本単元は、教材文「固有種が教えてくれること」から筆者の書きぶりの工夫を読み、「社会はくらしやすい方向に向かってるか」という課題に対して、それぞれの興味・関心のある内容で意見文を書き、互いの意見を「白島サミット」で伝え合うことを単元のゴールとして構成した。

本単元における「関わり合い」を、①文章と図表を結び付けたり図表の効果を考えたりして自分を他者と共有し、認め合うこと【互恵的な「関わり合い」】、②グループでの話し合いにより、新しい情報を得ること【累積的な「関わり合い」】、③互いの文章をより分かりやすく説得力のある意見文に高めていくこと【探究的な「関わり合い」】と設定した。

二 研究協議

Q グラフをどうやって選べたか。

A 自分の意見文に合うものをタブレットで検索して探したり、SDGsの関連図書から抜粋したりして児童が自分で選んだ。

Q 意見文を書く際に「分かったこと」と「考えられること」を入れた文章を書くためにはどのような指導や児童同士の関わりが必要か。説得力のある文章を書くには自分の考えと資料をどう関係づけるとよいか。

A 子供たちが自分の意見に向かって自分たちなりに考えられることが書かれていたらそれでよいと考えた。自分が選んだ図表を用いて、考えをもち、「社会が暮らしやすくなっているかどうか」ということを考えようとしていたらよいのではないかと考える。グループ活動や全体交流で検討していくうちに、より説得力のある文章にしていけばよい。

三 指導助言

広島市立宇品小学校 指導教諭 永島 恵美 先生

単元づくりでは、書く必然性をもたせること、達成感のもてるゴールを設定することができていた。学習過程には、協働的な活動が仕込まれ、次の活動に自信をもって進むための手立てとなっていた。学習の振り返りで、自己の変容について説明させ、板書で一般化して示したことは、めあての達成を自覚化することを促した。

今後は、行ったり来たりできる柔軟な学習過程、それぞれの配分で時間を設定することができる学習過程をつくっていくことについても意識して取組を進めていただきたい。

【文責】羽島 彩加

◆授業・協議会◆ 「本川小会場 第五学年」

単元名 物語の全体像を捉え、考えたことを伝え合おう 「たずねびと」

授業者 広島市立本川小学校 教諭 田坂 郁哉 先生

一 提案の概要

本実践では、「人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりする力」を身に付けることに重点を置いて指導した。そこで、綾の変化を捉え、物語の全体像を想像することができる言語活動として、音声付きスライドショーの作成を設定した。グループで、綾の変化に迫る「なぞ」を解決しながら、スライドショーの台本を考えることで、全体像を捉えられるようにした。

二 研究協議

Q 児童が扱う「なぞ」は、どのようにして立てたのか。また、本時であつかう「なぞ」は、どのように決定しているのか。

A 児童が扱う「なぞ」は、初発の感想で出てきた疑問を基に立てた。本時の「なぞ」については、綾の変化を捉えることにつながるであろう「なぞ」を教師が総合的に判断し、決定している。その他、出てきたなぞについては取り上げることがはしないが、話し合いの中で触れるように児童に声掛けし、掲示している。

三 指導助言

広島市教育センター 指導主事 櫻田 真一 先生

単元計画の最後に作者である朽木祥さんに手紙を書くという言語活動が設定してありゴールが明確になっているが、その際には、精査解釈が十分でないと書けない。人物の変化を想像し、どのように表現されているかを考えることで全体像を捉えることができる。平和学習が日常的にある本川小学校の児童ならではの想像力を働かせる必要がある。全体像を捉えるために設定された音声付きスライドショー（綾スタグラム）の作成は、グループでの精査解釈で、児童の主体的な交流が行われていた。スライドショーの台本に書き表すことは難しそうではあったが、児童同士の、叙述を基にした高度なやりとりが見られた。スライドショーの作成を通して、「なぞ」に迫っていた。子供たちが考えた「なぞ」は、全体像をとらえる手掛かりになっていた。本時の振り返りの際に、「物語全体を通して振り返りですか。」という、児童の発言は、全体像を捉えることを意識しながら物語を読み進めてきた成果である。

【文責】岩見 拓也

◆授業・協議会◆ 「白島小会場 第六学年」

単元名 作品の世界をとらえ、自分の考えを書こう「やまなし」

授業者 広島市立白島小学校 教諭 芝 徹生 先生

一 提案の概要

本単元の言語活動として、「宮沢賢治の作品世界やその魅力について考えたことをまとめる活動」を設定した。宮沢賢治記念館の方から子供たちに「広島の人に宮沢賢治の作品の魅力を伝えてほしい。」という依頼を伝えてもらい、目的意識や相手意識をもたせた。単元を通して行ってきたのは主に次の二つだった。一つは「宮沢賢治 BOOK コーナー」を設置し、並行読書に取り組むこと。もう一つは、毎時間の振り返りで、「やまなし魅力メモ」に書いておくこと。「やまなし魅力メモ」は学習支援システム「ミライシード」の「オクリンク」にためておく。ここに、「表現の効果」「宮沢賢治の生き方」「作品に込められたメッセージ」といった観点から自分の考えを書くようにすることで、子供たちが自分なりに作品世界を捉えていく単元を展開した。

二 研究協議

Q 一般的にあれもこれも取り入れて膨張しがちな単元構想について、本単元はどのような取捨選択を行ったのか。

A 劇化活動を取り入れた。登場人物の目線などを再現し、読みを深められた。単元計画には取り入れず選択性にしたのは、「資料」イーハトーヴの夢（伝記）。これは、子供が自由に手に取れるようにした。

Q なぜ、「資料」イーハトーヴの夢（伝記）を選択制にしたのか。

A 昨年、「資料」イーハトーヴの夢を単元計画に入れて授業を行ったが、児童の読みが賢治観に偏ってしまった。児童が多様な観点から作品と向き合うことができるよう選択制にした。

三 指導助言

広島県教育委員会 指導主事 関根 紗絵 先生

本単元は、次に示す三点が充実していた。①育てるべき資質・能力の明確な設定と、それを育成するための手立て。②宮沢賢治の魅力を伝えたいとする意欲を醸成する手立て。③豊かな読書活動につながる手立て。言葉は時代とともに変化するものだが、言葉に着目した捉え直しや問い直しなど、子供たちの「言葉への自覚」が促されるような授業や教育活動を行うことは、今後も重要な姿勢として意識していただきたい。

【文責】小泉 芳男

◆授業・協議会◆ 「本川小会場 第六学年」

単元名 物語を読んで、人物の生き方について考えよう「ヒロシマの歌」

今西祐行 作 篠崎三朗 絵 戦争と平和のものがたり④ ポプラ社

授業者 広島市立本川小学校 教諭 藤井 達也 先生

一 提案の概要

本実践では、「人物像や物語の全体像を具体的に想像したり表現の効果を考えたりする力」を身に付けることに重点を置いて指導をした。そのために「ヒロシマの歌」を読んで考えたことを伝え合う活動として、ドキュメンタリー番組の作成を言語活動として設定した。番組作りは、一問一答のインタビュー形式としており、その意図は、インタビューを受ける側が、自分の考えを短い言葉でまとめ、根拠のある回答をするために、叙述に戻る必然性に気付かせるためである。単元を通して、登場人物の人物像と物語の全体像を合わせて想像できるようにしたいと考えた。

二 研究協議

Q 全体像をどのように捉えていたのか

A 全体像の捉えには迷いがあつたが、一場面から三場面までをつなぎ合わせて読んだうえで出す答えが全体像だと捉えて本授業を行った。

Q インタビュー形式での活動は本時に必要であつたか。また、一問一答でのインタビューだったが、インタビューというのは複数回やり取りがあつてこそ成り立つのではないか。

A インタビュー形式を取り入れた意図は、自分の考えを短くまとめるということを意識させたかったためである。しかし、一問一答形式にすることで、グループ内での考えの深まりという点で課題が残った。

三 指導助言

広島市教育委員会 主任指導主事 大下 あすか 先生

爆心地に最も近い本校で学んできた児童にとつて、「ヒロシマの歌」は、既有的知識や理解した内容を結び付けて、自分の考えを形成することに適した教材である。

物語の全体像は、内容面だけでなく、表現面にも着目し、「〇〇を味わうことができる物語」などといった言葉で表現できるようにすることが考えられる。また、動画を作成し確認したり、場面ごとの映像をつなげて全体を見通したりすることが、児童への支援となっている。

第0次で、学校司書と連携して、物語と出会う場面を工夫していた。また、「なぜ解き」の設定が、子供たちの主体的な取組につながっている。

【文責】兒山 悠子

◆分科会提案◆ 「白島小会場 読む 一年」

単元名 オノマトペげきじょうくどんなようすかな？「おおきなかぶ」
提案者 熊本大学教育学部附属小学校 主幹教諭 溝上 剛道 先生

一 提案の概要

本単元で育成を目指す「場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像する」力を、「場面の様子（動作対象や背景など、動き以外の情報）に着目し、自分の身体感覚や経験と結び付けながら、登場人物の行動の様子をイメージする」力と捉え、実践を行った。即興的に演じることで、「表現と理解の相互循環」を促すこと、場面や行動の様子を表す「オノマトペ」を声に出しながら演じるように促すことで、文中の人物・動作を表す言葉と自分の身体感覚、経験などを結び付けながら、イメージの具体化を促すことをポイントとした。また0次では、「だるまさんが」「こねてのぼして」を学習材として設定し、実態差のある児童が単元の目標につながる「ようすのことば」「うごきのことば」への興味・関心を醸成できるようにした。

二 質疑応答

Q 児童の多様な考えを、どのように一つにまとめていったのか。

A 個々の考えでよいと捉えた。ただ、「書かれていないこと」を読むときには妥当性が必要である。関わり合いを通して精査し、妥当性を高めていけるようにした。

Q オノマトペを知っている児童と知らない児童の語彙量の差をどのようにして埋めていったのか。

A 授業前に関連する絵本に触れさせたり、前単元で意図的に着目させたりするなど、オノマトペで学べる機会を意図的に仕組んだ。

三 指導助言

熊本県御船町立御船小学校 校長 濱本 竜一郎 先生

岡本夏木(著)『ことばと発達』によると、「小学校では、就学前の生活で獲得してきた言葉とは質を異にする表現が求められる。」と述べられている。入門期における児童にとって、「登場人物の行動を具体的に想像する」学習デザインとして提案性のある内容であった。オノマトペに誘うジェスチャーゲーム、場面や行動の様子を表すオノマトペを声に出しながら、即興的に演じる試みの活動、オノマトペを介したオリジナル絵本づくりが非常に有効であった。児童は授業を通して、これから出合う物語を読む姿勢を身に付けることができたのではないか。

【文責】西村 由佳

◆分科会提案◆ 「本川小会場 読む 一年」

単元名 ほんものみたいなげきをしよう 「おおきなかぶ」
提案者 山口市立嘉川小学校 教諭 京谷 和樹 先生

一 提案の概要

相手との伝え合いをするためには、書くことよって表現の力を付けていくことが重要であると考えた。また、学びの手段として書くことを積み重ねることで、より自然に子供の書く力を付けることができると考えた。今回の実践では「読むこと」の単元である「おおきなかぶ」で、なりきり劇を行うために必要な課題を問い、様々な形で書かせる活動を行った。実践の成果として、一年生という発達段階においても、書くことに自然に慣れ、より詳しく・意欲的に書くことができていた。また、書くことで伝え合いにつながる場面も見られた。

二 質疑応答

Q 一年生全員が、入学後三か月でそれなりの文字表現ができるようになるまでの取組を、学級づくり等も踏まえて教えてほしい。

A 毎日、とにかく書く活動を設定した。一学期は、ずっと視写をさせて、「書く」という活動に親しませた。現在はテーマを設定して、文章を書く活動に取り組んでいる。また、読み取ったことを身体表現に置き換える活動にも継続的に取り組んでいる。

三 指導助言

周南市立徳山小学校 校長 磯村 勇 先生

・「思う」気持ちを表現する方法の一つに「書く」がある。逆に、「書く」ためには、何かを「思う」ことが必要になる。
・思うことと書くこととのつながりを意識して、子供たちの段階に合わせて単元のゴールとそれを達成するための課題を設定できるとよい。
・今回の実践では、「ほんものみたいなげきをしよう」という単元のゴールを子供たち全員が捉えていた。だからこそ、なりきりげきを行うための課題に対して、「思う」ことができ、「書く」ことで表現し、伝え合いが「思う」と「書く」ことを無意識的につながることでできたのではないだろうか。
・子供たちにとどのように思う力を付けていくか。思ったものをどのようにやり方で表現するのか。国語科の授業に取り組んでいく中で、考え続けたいものである。

【文責】村上 奏人

◆分科会提案◆ 「白島小会場 書く 四年」

単元名 事実を分かりやすくほうこうしよう 「新聞を作ろう」
提案者 広島市立亀崎小学校 教諭 井手口 智哉 先生

一 提案の概要

「新聞を作ろう（光村図書上）」では、「亀崎小学校の知られざるひみつを伝えようプロジェクト」とし、壁新聞を作成し、他学年に見てもらった活動を設定した。総合的な学習の時間と合わせて単元構成を組んでいた。

単元の導入では、同じ内容を扱った二つの新聞を比較し、相違点や共通点を出させることで、読み手を意識した文章とはどんな文章なのかを全体で確認した。子供が書く内容を整理する際は、思考ツールとして「くま手チャート」を活用して、「読み手に伝えたいこと」「これから調べること」の項目を設け、それぞれに整合性があるかを把握できるようにした。常に読み手を意識することで、「一番伝えたいこと」を明確にして新聞を書くことができた。

二 質疑応答

Q 子供に事実を書かせることが難しいと思うが、事実を理解させていく、アウトプットする過程にどんなことをしたのか。

A これまで学習した説明文の文末に着目させ、どんな文末が調べたことになっているか、筆者の感想になっているかなど説明文に立ち返りながら確認していった。

Q これまで子供たちが意欲的になった新聞の題材に何があるか。
A 同じ中学校区の小学校で、自分の学校よさを紹介する新聞を交換する活動を設定した。相手が明確なので書く内容が精選された。

三 指導助言

広島市教育委員会 指導主事 松本 穂高 先生
複数の新聞を授業に取り扱う活動が好事例だった。比較することで対象の違いだけでなく、伝えたいことが明確になっているという共通点にも気付いていた。また、「くま手チャート」をアレンジし、伝えたいことが意識できるように工夫することで、伝えたいことと調べたいこととのつながりを考えながら、複数の観点から書くことを選ぶことができていた。今後は、成果物の新聞の構成や内容だけを評価するのではなく、多様な評価方法を計画することで、児童の主体性を育てることができるだろう。

【文責】渡邊 真悟

◆分科会提案◆ 「本川小会場 読む 四年」

単元名 気持ちの変化を読み、考えたことを話し合おう 「ごんぎつね」
提案者 北九州市立花尾小学校 教諭 大槻 優衣 先生

一 提案の概要

本実践では、個人の感想を基に、みんなで考えていきたい問いを生み出していく過程を大切にすることで、問いについて考えていくことができるようにした。また、必要な対話の在り方についても児童に投げかけることで、児童自身が学習を組み立て、伝え合い、自分自身の考えを広げ深めていく力の育成を図った。このような力を付けていくため、次の三つの着眼点に沿った手立てを行った。

- ①児童自らが「問い」を生む単元設定の工夫
- ②自分の考えをもち、友達と共有することで、考えを広げ深めるための工夫
- ③学んだことを自覚し、次に生かす振り返りの工夫

二 質疑応答

Q 問いを児童と決めることで、児童は、どのように主体的に学習に取り組むことができていたのか。

A 同じ言葉でも、自分と友達では、違った意味で捉えていることに気付くことができた。対話や、言葉の一つ一つを見ることを通して、飽きずに最後まで物語を読むことができるようになった。また、場面をつないで読むことの面白さや解釈の違いの面白さを感じることができるようになった。

Q 三つの問いを探る中で、新たな問いが生まれたのではないか。
A 二つ目の問い（第三場面までのこと）を考えていく中で、児童が第四・五場面にも着目するようになり、三つ目の問い（ごんは、どのような気持ちで兵十や加助の後を付いていったのだろう）が生まれた。

三 指導助言

北九州市立赤崎小学校 校長 二宮 利之 先生
・対話を通して、自分の考えを形成する」という視点から、「対話」の捉えを明確にもって指導に当たることが大切である。
・問いの生み出しから始まる学び」の視点から、「問い」を児童自らがつくるためには、段階を意識して「問いをつくる」経験を積み重ね、問いを解決できた成果を明らかにして、価値づけることが必要である。
・「指導と評価の一体化」の視点から、本実践における児童の学びの足跡の分析や次時への生かし方は、秀逸である。

【文責】中田 江美

◆分科会提案◆ 「白島小会場 読む 五年」

単元名 伝記を読んで考えたことを、プラスアップ文集に残そう

「やなせたかしーアンパンマンの勇氣」

提案者 広島市立宇品小学校 教諭 清水 弥生 先生

一 提案の概要

主体的な学びが持続する単元の作り方と対話的な学びに向けた対話を充実させるための方法の二点について提案した。一点目は、学びの必然性を生むために、言語活動として自分たちの成長を支えるクラスの文集「五年四組プラスアップ文集」を作ることを設定し、学習のゴールを明確にした。また学習の計画を示し授業ごとに確認することを通じて、学習のゴールを確認できる環境を整えた。二点目は、授業内で行われる「対話」を「教材との対話」「他者との対話」「自己との対話」の三つに分類した。それぞれの対話を通じて、とりわけ他者との対話のもつ価値について肯定的な思いをもつ児童が増え、自分の考えの深まりにつながることができた。

二 質疑応答

Q プラスアップ文集の取組の具体的中身について

A 伝記を読んで、いいなと思った出来事や人物の様子から人物像を捉え、自分のこれまでの生き方と関わらせながら考える場を設けた。最後には読み手へのメッセージを残し、クラス文集として全員に配付した。

Q 課題を踏まえ課題を解決できる手立ては何かあるか

A 時間の問題があり、時数の確保で解決できる部分が多い。学習者が悩んでいる部分で相談できる時間があればなおよかった。

三 指導助言

広島市立宇品小学校 指導教諭 永島 恵美 先生

学習者の言葉を繋ぎながら主体的な学びを引き出し、さらに主体的な学びのエネルギーの持続を体現した実践だった。目の前の学習者の実態を的確に把握し、その実態を踏まえて適切な言語活動を設定したことが、意欲の喚起につながった。ゴールを見据えた単元づくりを基盤とし、言語活動のネーミングや並行読書の選書、デジタルとアナログのよいところを生かした柔軟なツールの選択、学習者への見通しのもとせ方など、細部に渡り、学習者が意欲的に学習に取り組める環境を整えられていた。本実践には、様々な対話を繰り返し、自己の考えの変容を自覚し、他者と考えを共有する姿があり、深い学びを実現するための工夫が単元を通じた活動の中に適切に位置付けていた。

【文責】原田 啓

◆分科会提案◆ 「本川小会場 読む 五年」

単元名 山場で起こる変化について考えよう

「世界でいちばんやかましい音」

提案者 仙台市立南小泉小学校 教諭 渡邊 ひろえ 先生

一 提案の概要

学びの有用性を実感できる学習の在り方を探ることは「子供たちの生活に生きる言葉」の力を育成することに大きく関わると考える。本単元では、物語の構成に着目し、物語の全体像を具体的に想像する力を付けさせることを目標とする。さらに、児童に単元の学びを通してどのような力が身に付いたのかを自覚させると共に、学びの有用性を実感させたいと考えた。学びの有用性を実感させるため、①単元において身に付けさせたい力の明確化②「物語の構成」の理解を深める副教材の使用③単元内における学びの活用場面の設定の三つの手立てを行った。

二 質疑応答

Q 副教材を利用した実践を知りたい。

A 各学年で学んだことをどう使えるようにしていくか、アイデアを出し合っていくことが大切である。「大造じいさんとがん」では、情景描写を捉えさせたいので「スイミー」を使った。物語の構造を分析する際には「ももたろう」が有効だった。

Q 山場の定義をどのように捉えているか。どう指導しているか。

A 今回は中心人物の心情が大きく変化したところと指導した。物語によっては主人公が他者によって変容したり、立場が逆転したりと様々なで、山場の定義を教師がしっかり意識しておく必要がある。

三 指導助言

仙台市立南光台小学校 校長 早坂 順子 先生

本大会が目指す「国語科で付けた言葉の力を生活の中で生かすことができる子供の姿」に直結する実践内容だった。知識や技能が習得されても、活用されなければ意味がない。習得した知識や技能を活用する場が必要であり、自分にどんな力が付いたか明確になっていないと活用もできない。本提案は、単元内に活用場面を設定し、子供が学びの自覚をもつことを大事にしていた。単元などまとまりの中で習得・活用・探求のバランスを工夫することに通ずる取組であった。学びの活用に着目した、学びの有用性を実感できる物語文の学習について、提案性のある内容だった。

【文責】金光 靖子

◆分科会提案◆ 「白島小会場 話す・聞く 六年」

単元名 イエス！ or ノー！〜聞く力を高めて、説得力のある話し合いをしよう〜 「聞いて、考えを深めよう」

提案者 東村山市立萩山小学校 教諭 山内 隆太 先生

一 提案の概要

「したい！」が生まれる授業づくりということで、①児童の実態や身に付けさせたい力を基にした授業づくり②児童が「〜したい」と思える単元計画の工夫③音声入力を使ったICTの活用の三つの視点で取り組んだ。児童とともに話し合いの目標を設定し、ICTを使って話し合いを振り返るようにした。児童が「したい！」と思えるように話し合いの題材を児童が出し合い、「好み」に偏らない題材を設定した。また、ICTの音声入力を使って自分自身の話し合ったことを記録した。本単元では、根拠を様々な視点から考えることができている。また、話し合いの工夫を話し合い、掲示物を作成することにより、他教科の話し合いでも活用できた。課題としては、話し合いに没入していたが、友達の考えの理由や説得力のある言葉に注目させ、自分の考えをまとめる時間が必要であった。

二 質疑応答

Q ICT機器がどのような影響を与えていたのか。

A 言葉の使い方がわからなかったように、文字起こしの方法を紹介すると、子供たちから使ってみようという声が上がった。

三 指導助言

全国小学校国語教育研究会 顧問 川畑 庄二 先生

子供たちが話し合いたい、聞きたいとなるような話題の設定が大事である。いい話題とは、「①子供たちの興味や関心、実態に合っていること。②身に付けさせたい力とどう関連付けるか③子供自身が話す材料を探すことができる。」を満たしているものである。

国語科では、言葉を通して人間形成をし、豊かな言語生活者の育成を目指す。話し合いでは相手の意見をしっかりと聞く力が必要である。

話し合いを使うと頼ってしまうこともあるが、思考が整理されたり、自信をもって話したりすることができるようになる。自信をもったときに話し合いを外していけばよい。また、司会者を育てることが大切なので、小グループで何度も経験させる。手順を教え、モデルを見せることが必要である。

話す、聞く、コミュニケーションの能力は、すべての教科、生きていく上で重要である。

【文責】 田坂 綾香

◆分科会提案◆ 「本川小会場 話す・聞く 五年」

単元名 梅林地区防災意識向上プロジェクト 「よりよい学校生活のために」

提案者 広島市立梅林小学校 教諭 吉田 祐記 先生

一 提案の概要

・地域の防災意識が風化しているという課題から、地域の方より「地域の防災意識向上のための取組を小学生にも考えてもらいたい」と依頼してもらったことで、必要感のある学習課題を設定した。
・国語科と総合的な学習の時間を横断することで、従来一回しか設定できなかった「話し合う」場面を複数回設定した。
・ジャムボードで共同編集したり、話し合いの様子を撮影し、振り返りに生かしたりするなどICTを活用した。
・話し合うグループと観察するグループに分け、話し合い終了後に観察者から参加者に評価を伝える等、場の工夫や児童の相互評価を取り入れた。

二 質疑応答

Q この単元で「話す・聞く」の姿がどのように変わったと捉えているか。

A 授業後に子供たちが、話し合いが役に立つという感覚をもてたことが成果を体現していると感じている。

Q モデルを示す以外に手立てがあれば教えてほしい。

A 活用すべき言葉の一覧を示した。もう一つは司会進行表を配付した。

三 指導助言

広島市教育センター 指導主事 櫻田 真一 先生

広島大会で目指していることは、広島市教育大綱に示されている。指導要領解説にも「理由を尋ね合う。」とあることから、発表者が質問を重視していたことは、身に付けたい資質・能力と合致している。

地域の実態を把握し、総合的な学習の時間と国語科を横断しながらの単元構成の工夫で質の向上につながっている。教育課程の編成の理想的な姿であると考える。また、今回、話し合う活動の振り返りを複数回行っている。単元構成の工夫により、話し合うことの振り返りを複数回行うことは、資質・能力の獲得に非常に効果がある。さらに、教師からこのICTツールを使いなさいと示すのではなく、子供たちの必要に応じて、使うことのできるICTツールの情報提供をしているところが良い。

【文責】 村本 賢治

◆分科会提案◆ 「白島小会場 書く 高学年」

単元名 とっておき〇〇術教えま〜生活を取り返ってコツや手順を紹介する文章を書く（開発単元）

提案者 東京都板橋区立志村第四小学校 指導教諭 高桑 美幸 先生

一 提案の概要

本単元では、「考えの明確化を意識する力」「自己調整を行う力」を児童に付けることを目指した。その際、①「単元開発（〇次、文例の提示、実感のある実の場）」②柔軟な学習過程（往還的な学習過程、複線型の学習過程）③評価活動の充実（座席表型指導簿、自己評価／チェックシートなど）という三つの柱を踏まえ、実践を行った。情報の収集、内容の検討や構成では、児童自らが思考ツールを選んで使ったり、二種類の対話（グループ交流での対話、自己内対話）を通して、自分の考えを明確にしたりした。さらに、毎時間、学習の振り返りシートを活用した。個別の学習課題に応じて、学習活動を自分で確認、選択できるようにした。

二 質疑応答

Q 座席表型指導簿は、毎時間書き換えていくのか。

A 実際に毎時間作るのは難しく、ここだという部分で作っている。これは、昭和三十年年代から行われており、「座席表カルテと言われるものである。これがあることによって、授業の中で机間巡視をしながら常に書き込んでいくことができる。その結果、子供の実態がよく分かり評価もできる。また、ある児童が困っているとき、座席表カルテを基に、話合いの相手になる児童を決めることもできる。

三 指導助言

全国小学校国語教育研究会 顧問 飯田 薫 先生

・今回の授業では三本の柱（①始まる前から単元と関わる内容に触れている「〇次」②ゴールのイメージが示され、指導事項がにじみ出ている「文例の提示」③「実感のある実の場」）がしっかりしているため、高学年として力がぐんぐん伸びるものとなっている。
・作文を書くときは、題材の設定が一番大事。「誰に知らせるのか」「何を知らせるのか」など、児童自らが書きたいことを選択し、自分の書きたい心を明確にする。そして教師は、書く工夫や技術を教える。「何を書くか」「どのように書くか」が融合して書く力は向上する。

【文責】尾上 春佳

◆分科会提案◆ 「本川小会場 書く 五年」

単元名 分かってほしい自分の考え 「あなたは、どう考える」

提案者 海田町立海田南小学校 教諭 名和原 奈穂子 先生

一 提案の概要

・調べたことを知らせる報告文、相手に自分の考えを分かち合ってもらったの意見文、イベントを提案し採用してもらった提案文の学習を行った。
・一年間を見通す学習計画を立案し、学習内容を次の「書くこと」の学習で生かすことができるようにした。また、書く相手をクラスメイト、他校、他学年、役所の方などに設定することで、多様な相手を想定した言語活動を実践することができた。
・実践を積み重ねることで、書いて伝えることのおよさを実感する児童が増加し、目的や意図、相手を意識しながら書く姿勢が身に付いた。

二 質疑応答

Q 「努力を要する」状況にある児童に対する手立ては

A 全ての単元で学習過程の全てを丁寧に指導することは、時間の問題もあり難しい。指導事項に即して、この単元ではここができたらOKということや予め児童に伝えた。最後まで書ききれなくても、単元で設定した指導事項についてできたところを評価する。継続的にすることで「全く書かない」ということは無くなった。

Q 他の人とどうやって交流するのか

A 構成の検討を行う前の、収集した情報を整理する際には Google Jamboard を活用した。取り掛かる段階でつまづいていた児童は他の児童が整理した Jamboard を見て学んだことを足がかりに学習を始めることもある。ICT の活用には可能性がある。また、他校の児童との交流においてもオンラインを活用したが、顔が見えると相手意識が明確になった。

三 指導助言

広島県教育委員会 指導主事 福田 菜津美 先生

・本実践提案における①指導事項の明確化②言語活動の工夫③対話的な学習を促す学習活動の工夫について特に参考にされた。
・各校において、①資質・能力をバランスよく身に付けることができる指導上の工夫②学校内における授業での工夫の共有についても意識していただきたい。

【文責】丸田 健太郎

◆分科会提案◆ 「白島小会場 読む 六年」

単元名 作品の世界をとらえ、自分の考えを書こう「やまなし」

提案者 福山市立新涯小学校 教諭 木下 恵介 先生

一 提案の概要

本単元の特徴は以下の二点。一点目は、学習者がそれぞれに「目の付けどころ」を意識しながらテキストを読み、その解釈を巡って他者と交流を行うことで、作品の全体像や主題をつかむことである。二点目は、作品の主題を追求し自分なりにつかんだ学習者が、自身の価値観に影響を及ぼすような「典型化」の段階へと至ることである。「自分はどのような目の付けどころで読むのか」を意識させることは、学力的課題が見られる学習者にとつても、自分の考えをもつ上で有効であった。さらに、その考えを多様な他者と交流し、広げ、深めていくことを通して、全ての学習者が作品の全体像までつかむことができた。

二 質疑応答

Q 学習者が適切な主題を形成できなかったという発言があったが、それはどういうことか。

A 作品に寄り添うことと、作者に寄り添うことが大切と考えている。このどちらもくぐっていない学習者の様相のことを、適切な主題を形成できなかったと判断した。

Q 「典型化」は単元の最初と終末どちらで意識させるのか。

A 文学作品を扱うときには、作品を正確に読むことを促すとともに、典型化につながるような投げかけを意識している。また、自分自身の学びの深まりを視覚的にもわかる手立ても心がけている。

Q 他校との交流の意図について詳しく説明を。

A 教室の中にある見えない権力関係に読みが引きずられることがある。それを越える為の他者として、他校との交流を活用している。

三 指導助言

福山市教育委員会 指導主事 藤原 杏子 先生
本提案の良さは大きく三点。一つは、学習者が自ら読むことの価値を掘り起こしている点。二つ目は、学習者が自分なりに作品と向き合う自由度を保証している点。三つ目は、「目の付けどころ」が読み深めに有効であった点。全ての教科等における学習の基盤である「言葉」を学習対象としている国語科の役割を改めて考え、言葉を意識した授業改善に取り組んでいく必要がある。

【文責】山中 勇夫

◆分科会提案◆ 「本川小会場 読む・書く(複合) 六年」

単元名 表現の工夫をとらえて読み、それを生かして書こう

「鳥獣戯画」を読む

提案者 広島市立春日野小学校 教諭 室積 良祐 先生

一 提案の概要

本教材で主張を強調するための言葉の表現の工夫や論展開の仕方、絵のしの方の工夫について捉えさせた。それを生かして自分自身が伝えたい広島の魅力についてリーフレットに書き表すことをねらった。完成したリーフレットを平和記念公園や広島駅に設置することを子供たちに伝え、目的意識と相手意識を喚起できるようにした。

二 質疑応答

Q 単元の導入で、春日野小学校の「いいね！」を伝えるための文章を書き「うまく書けない」という困り感を共有したが、書き直しはしたのか。

A 書き直しはしていない。書き直しをさせて変容を比べれば、より学びの時間につながったと思う。

Q 作成したパンフレットを見た方と子供たちをつなげるための手立てはあったか。

A 各施設に、「一言コメントカード」を置いた。いただいたコメントを子供たちに読んで還元した。

三 指導助言

広島市教育委員会 主任指導主事 大下 あすか 先生
本提案では、学習の目的と目指す姿を教師と児童が共有し、児童が学習の必然性を感じられるよう工夫していた。困ったことから課題意識をもたせたが、子供の実態によっては意欲が下がってしまうこともあるので、実態に合わせて行うとよいと考える。
繰り返し段階的に学んだことを活用する単元構成になっており、どの領域や教材であっても、本実践の成果を生かすことができる。
リーフレットをほどよい距離感の人(地域の方など)に見てもらい、評価の言葉をいただくのもよいだろう。自分の文章のよさを見つけただけでなく、地域の方との関わりが生まれ、地域の活性化にもつながる。
児童の振り返りを次時の導入に活用すると、単位時間ごとの学習のつながりを子供たちが意識できるようになる。教師も子供も学んだことが他の学習でも生かせないか視点をもつことが大切である。

【文責】山野井 龍二

第五十四回山口大会に向けて

山口大会実行委員長 間恵 満貴

第五十四回全国小学校国語教育研究大会を、令和六年十一月に山口の地で開催するための準備が進んでいます。大会の運営に直接関わっている山口県小学校教育研究会国語部の活動には、山口県国語教育研究大会「実践者の集い」、「山口県国語」の発刊、山口県児童文集「あくしゅ」の作成などの活動がありますが、令和六年度の「実践者の集い」を全国大会として開催することが決定したのは令和元年度に遡ります。それから間もなく世界中が新型コロナウイルス感染症の影響を受け、参集しての研究会開催が不可能な状況になりました。それでも私たちは、令和六年度の山口での研究大会開催に希望をもち、準備を進めてきました。

令和四年には準備委員会を発足させました。そして、二〇〇四年の下関大会、二〇一四年の防府大会で小中高共同大会を開催してきた山口県の伝統の引継ぎ、令和六年度も小中高の共同大会とすることに決定しました。大会主題を「小・中・高を貫く言葉の学び」国語科における『深い学び』とは何か」と設定し、研究授業や実践発表を通しての『深い学び』の捉え方、授業づくりについて研修したり「小・中・高を貫く」とはどういうことなのかなど、小・中・高校の教員が合同で研修会を行ったりすることで、国語教育の系統性を意識した研修の交流を進めております。また、県内の有志による研究団体である、山口言語教育研究会「櫛の会」、山口国語教育冬季学習会「冬濤の会」とも連携し、授業者、実践発表者、指導助言者が一緒に研修を行う場も設けました。

本大会では、一日目に基調提案、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 国立教育政策研究所教育課程調査官・学力調査官 大塚健太郎様の御講演、山口県の御出身で、「カレライス」「卒業ホームラン」など、数多くの作品が教科書に掲載されている作家の重松 清様の御講演をいただきます。二日目には小・中・高は別会場での開催になりますが、小学校では三本の授業公開と研究協議、県内・県外からの合計十四人の先生方による、七領域での実践発表を予定しております。これは、県内十五支部を十ブロックに分け、それぞれのブロックで授業や実践発表を行うというところで、一部のブロックや学校に過度な負担をかけないように配慮した「オーラル山口」での取組を意識したものです。

広島大会でも御挨拶させていただきましたように、「小・中・高を貫く言葉の学び」「国語科における『深い学び』」の追求はもろろんですが、風光明媚な大自然、海の幸、山の幸、そしておいしいお飲み物で、山口を満喫していただけることを願っております。

(山口県山陽小野田市立須恵小学校長)

【令和五年度 全国小学校国語教育研究会 第二回理事会・総会報告】
令和五年十一月十六日(木)、広島市にあるJMSアステールプラザにて令和五年度全国小学校国語教育研究会第二回理事会が開催された。審議事項については、満場一致により御承認いただいた。

- 一 会長挨拶
- 二 開催地代表挨拶
- 三 顧問代表挨拶
- 四 報告及び審議

- (1) 中間会務報告と今後の計画
 - 第三十三回夏季実践交流セミナーについて
令和五年七月三十一日(月)、渋谷区立上原小学校にて開催された。参加者は百三十名超であった。
- (2) 教員表彰・感謝状の贈呈について
全国小学校国語研究所の研究について
今後の全国大会の開催地について
令和六年度 第五十四回山口大会
令和七年度 第五十五回宮城大会
令和八年度 第五十六回東京大会
- (3) その他 全小国研ホームページ開設について
- (4) 各都道府県・政令指定都市の国語研究情報について
- (5) 全国理事を中心に、各地の国語科教育研究の現状や課題等について意見交流を行った。

五 理事会終了後、総会が開催され、理事会で御承認いただいた内容についての報告、感謝状の贈呈が行われた。

《感謝状贈呈》

- 第五十三回全国小学校国語教育研究大会広島大会 会場校
- 広島市立白島小学校 様 (校長 本家 太 様)
- 広島市立本川小学校 様 (校長 築地 陽子 様)

本紙において、お名前と共に記載のある御所属・職名は、令和五年度当時のものです。